

中学校 美術科 部会

部会長名 赤村立赤中学校 校長 伊藤 敬之
研究員名 糸田町立糸田中学校 教諭 井植 公一

1 研究主題

「生きる力」を育む学習指導の研究（2年次）
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～

2 主題設定の理由

（1）社会的な要請と新学習指導要領の動向から

日本の教育界の中では、受験のための学力が、豊かな人間性の育成を阻害しているという指摘の中で、これからの教育では、感性、知識、技能を踏まえた心の教育が叫ばれている。そのためには、生徒自らが学ぶ意欲と喜びを持ち、個性を生かして学習していく過程で、自分のやり方で、主体的に基礎的・基本的な知識や技能を身につけていき、それを通して豊かな人間性と充実した生活を築いていく事ができるような学習指導が展開されなければならない。学習指導要領が目指している「自ら学び、自ら考える力、主体的に判断する力、感動する心、豊かな人間性の育成」など「生きる力」の育成は、まさしく美術の本質と合致したものであるといえる。

（2）新学習指導要領の中での美術科の意義

美術の活動は感性と知性が一体となって感じ取り、考え・想像を働かせながら全身を使って創造するという、人間の全感覚・叡智を働かせて行う統合的活動である。これからの社会の変化に対応できるように美術の基盤でもある鋭敏な感性を的確にとらえて対応していかなければならない。

また“豊かな人間形成”という生涯学習社会への一翼を担っている教科であることの意義を十分に意識し、実践していくことが大切だと考え、新学習指導要領に基づいた“確かな学び”を美術科の立場からとらえながら、自らの感性、創造性を豊かに育もうとする学習態度と、心豊かな生活を創造していく意欲・態度・情操の育成を図らなければならない。

（3）生徒の実態から

平成20年に改訂された学習指導要領の図画工作科の学習目標は、『表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。』とある。

知識教科といわれるものはテストによって、ある程度学習成果を確認できるが、美術教育の成果は数値化できる性質ではなく、多面的な考察をする必要がある。

そこで、多面的な考察をしていく観点として、以下の10点をあげた。

- ①美などを感じ取る力（感性、美的直観力、美的感覚）
- ②思いめぐらす力（想像力、発想力、推測力）
- ③対象をとらえる力（観察力、探求力、形や色の認識力、美の認識力、空間・立体の把握力、分析力、柔軟な見方）

- ④考えを練る力 (構想力、視覚的思考力、抽象的思考力、判断力、企画・計画力、情報の創造・伝達能力、論理性)
- ⑤知識・技能を習得する力 (理解力、技能・巧緻性)
- ⑥工夫し、発見する力 (創意工夫する力、改善する力、)
- ⑦創造表現する力 (美的造形感覚、構成力、材料感覚、表現技能)
- ⑧ものごとに取り組む力 (集中力、誠実さ、根気、主体性、自発性、試行錯誤)
- ⑨作品を味わう力 (鑑賞力、審美眼、美意識、コミュニケーション能力、情報を読みとる力、批判力)
- ⑩関心・意欲・態度・心情 (創造意欲、美に対するあこがれや喜び、美術を愛好する、尊重する心情)

3 主題・副主題の意味

(1) 「生きる力」を育む学習指導とは

美術科では、3年間の授業を通して豊かな心の形成、能力の形成、態度の形成の三つの側面から、総合的、系統的に資質を育て伸ばしていく事が大切だと言われている。また一人一人の子どもが人間として成長・発展していく過程を大切にしながら、豊かな人生を形成していくために、想像力を働かせて自分の思いをかたちにしていくことが重要であり、そのためには生徒が表現する楽しさや喜びを味わうことを通して、生涯にわたって美術に親しむ態度を育成することが大切である。

このように、豊かな人間性をはぐくみ、生涯にわたって芸術を愛好する心情を育成するためには、調和のとれた資質や能力の育成を図り、知覚し感じ取る力、批評する力、構想する力、人間関係を構築する力などを高めることが重要である。

そこで美術科の4つの観点からそのねらいを整理するとともに、それぞれの観点を示された資質や能力が育成されるように、具体的な指導内容や指導方法等を検討することが必要である。また、各科目の評価の観点を踏まえ、生徒の実態や学習内容に合わせた観点別の評価規準を作成し、評価の客観性と信頼性を高めるとともに、生徒の学習意欲を高めるための評価方法を改善し、評価の一層の充実を図ることである。そこで、授業における思考力、判断力、表現力を見取る評価の位置づけをし、個々の生徒の作品制作への糸口としていく。

また生徒自身が表現したい事を主体的に創造していきながら、鑑賞活動を通し、他者に対する理解を深めていく事がより豊かな人間性につながっていく。

そこで今回の学習指導要領の改訂では、子どもたちの思考力、判断力、表現力等を育む観点から、主体的な活動及び、鑑賞活動において、言語活動を取り入れながら、基礎的・基本的な知識・技能を習得させていく事で、思考力、判断力、表現力を高めていく活動を言う。

(2) 「主体的・対話的とは」

主体的とは、学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持ち粘り強く取り組むとともに、自らの学習活動を振り返って次につなげていく活動であり、対話的とは、子供同士の協働、教師や地域の人との

対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深めていく活動である。

(3) 「深い学びとは」

平成27年8月26日に出された「教育課程企画特別部会における論点整理」の中で、「深い学び」について触れられ、下記の2点に要約されています。

- ・学びは、知識を習得することに止まらず、それを活用し、自ら探究することで深まる。
- ・他者と一緒に学んだ方が、考えも広がり、深まる。

自分一人で分かったつもりになっていても、他者に説明してみたらうまく言えなかった、他者の話を聴いたら自分の気づけなかったことが分かった、そうした対話的活動を通して学びが深まるということになります。

(4) 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善とは」

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善とは、主体的・対話的・深い学びの3の視点から学習過程の質的改善を行う。そしてその具体的な手立てとして以下の3点を重要な項目として考えた。

◇資質・能力を関連させて発揮させる

- ・これまでの経験を生かすことのできる学習活動を充実させる。
- ・一人でじっくりと材料や場所、表現と向き合い、アイデアスケッチなどに考えを整理したり、試行錯誤したりする場をあたえる。
- ・造形的な視点で互いの表現を見合い、感じたことや考えたことを伝え合うなどの言語活動を充実させる。

◇学びを実感し、深めていく

- ・これまで学んだことや造形的な視点を生かして、友達と学び合う学習活動を設定する。
- ・一方向の流れではなく、必要に応じて、行きつ戻りつする学習過程を重視する。

◇自分の成長やよさを自覚し、可能性に気付かせる

- ・造形的な視点で、自分の活動を確かめたり振り返ったりすることのできる場を設定する。

以上のことを通して、「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」を育成していく。

4 研究の目標

美術科において、新学習指導要領がめざす「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善について究明する。

5 研究の内容

(1) 生徒の実態を分析する。

- (2) 主題を設定する。
- (3) 主題を達成すべき学習指導と評価方法を明らかにする。
- (4) 主題に基づいた研究実践を行う。
- (5) 実践事例としてまとめ、成果と課題を明らかにする。

6 研究仮説

美術科において、対話的な活動を位置づけた学び合い活動やより主体的な学びができる手立てとしての承認を位置づけていくことにより、新学習指導要領がめざす確かな学力を身につける事ができるであろう。

第1学年 美術科学習計画案

1. 題 材 「色との出会い」

2.

○ 中学校1年の発達段階では、見て描く事はできるが、既成の形や自然にある形を変形したり、省略したり、また自由に抽象形を創造していくことは難しい。色の使い方においても、そのものが持っているイメージや性質は理解しているが、構成していく上では、ややもすれば、機械的で単調な作業になりやすく、色どうしの組み合わせ方については、好きな色の組み合わせで選択しており、今後も学習を積んでいかなければならない。

一方デザインにおける基礎指導を行うとき、どうすれば色や形に「美」を感じ、感性を育てられるだろうかと考える。そこでこの題材では、形の割合や構成によって、出される色の変化を体験させていく事で、より感覚を養ううえで有効な手立てであり、適した題材であると思われるので設定した。

○ 最近の生徒は、熱しやすく、さめやすい。すなわち、興味を持ちやすいが、長続きせず、途中でなげだしてしまう傾向にある。このことについては、絵画も彫塑も同じ事がいえる。

本学級の生徒は、『美術が楽しい』という生徒が大半であり、事前アンケートから、「絵が苦手でも、すごい作品に仕上げられるから。」「できた時の、達成感があるから。」「形に残るものを作れるから。」等の意見があげられ、授業における関心も高く、雰囲気もいい。

また、生徒は、好きなジャンルの中では、『デザイン』と答えた生徒が多く、理由としては、「考えることが楽しいし、作っていく過程が好き。」「想像する事が楽しい。」等の意見があがり、また、『色』に対しての興味についても、ほとんどの生徒が「興味がある」と答えており、今回行う題材においては、興味・関心度が高い内容であると考えられる。

前時の学習では、色の性質や役割、混色についての基礎学習を行っており、今回

は、基礎的な混色の知識をもとに、白と黒の限定されたデザインの発想や構成（表現）をさせていきながら、子どもたち一人ひとりの『色』における構成力や創造性を育てていくうえで大変有意義なことであると考え。また、本題材においては、特に新しい体験であり、子どもたちの主体的な活動や子どもたち一人ひとりが自由な形の捉え方や発想をすることが可能になると考える。

- 本題材の第1次では、色の性質・役割について理解させている。その中でも、色の混合による指導においては、イメージがつかめない部分もある。実際に、絵の具を用いた混色では、理解できるものの、回転させて混色させていく事については、日頃できないだけに生徒の興味関心を一層高めていく事ができると考える。

発想や構想の段階においては、各班で、話し合い活動を設定し、白色と黒色の割合や構想をシュミレーションさせていき、班ごとに発表させる。表現の段階では、各班から発表で出された案をもとに、各自でそのイメージを膨らませながら、デザインをしていく。鑑賞の段階では、各班から出されたデザインを実験しながら、色の出方に法則がないかなどを意見交換会を行っていきながら、デザイン学習の大事な要素である第三者の視点にふれるとともに、混色(回転混合)の特徴を確認していかせる。そして最後に、今回の作品制作を振り返り、個人用の鑑賞カードに記入していかせながら、今後のデザインにおける自信へとつなげていきたい。

3. 目標

①色の性質・役割について興味を持つ事ができる。

(関心・意欲・態度)

②色の性質・役割を理解しながら色の割合や構成を考えていく事ができる。

(発想・構想の能力)

③色の割合や構成を考えながら、さまざまな色をつくりだす事ができる。

(創造的な技能)

④友達のアイデアや表現方法のよさを味わう事ができる。

(鑑賞の能力)

4. 全体計画（3週）3時間

《第1・2週》 ・色の性質・役割について理解させる。

(明度・彩度・色相) ……色の三要素

- ・12色相環と明度と彩度の関係について理解させる。
- ・補色効果について理解させる。(残像現象)
- ・色の混合(加算混合・減算混合・中間混合)について理解させる。
- ・中間混合……(併置混合・回転混合)について理解させる。

《第3週》 ・回転混合を実際制作していき検証してみる。(本時1/3)

5. 本時

平成30年7月17日(火曜日) 第2校時 美術教室に於いて

(1) 主 眼

- 各自がいろいろな色を出す工夫をしたデザインをしていくとともに、そのデザインされた回転紙を回転させる事で、混色における明度の変化に気づく事ができる。

(2) 準 備

生徒：筆記用具
 教師：回転用紙・回転板・学習目標 TP・内容要約のTP・デザイン用紙
 マジック（黒）・評価用紙

(3) 展 開

	学 習 内 容	形態	指導上の留意点	評価基準・方法	配時
導 入	1. 前時の学習を確認をする。 中間混合（回転混合とは） ・ある色とある色を混ぜ合わせると元の色の中間の明度になる混合の仕方を確認する。 ・回転させる事で、色が出てくる事を確認する。	全	<ul style="list-style-type: none"> 色の混合には、加算混合・減算混合・中間混合があるという事を確認させる。 中間混合の中には、並置混合と回転混合という手法があり、明度が中間になる事を確認させる。 		5
	2. 本時の学習の確認をする。 <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 色 を 出 そ う !! </div>				
展 開	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;"> 【学び合い】 </div> 3. 各班で検証し、発表する。	全 ↑↓ 班	<ul style="list-style-type: none"> どのようなデザインをすればより多くの色を出す事ができるのかを検証させていく。 	関) 意欲的に交流している学習プリントに記入している。 [発言・学習プリント]	10
	4. 各自で、検証をもとにデザインする。		<ul style="list-style-type: none"> それぞれの班から出された検証を考えながら、デザインをさ 	発) 検証をもとに、デザインを考えて	15

			せていく。(白黒の割合・構成) ・後の発表する代表者を1名選出させる。(一番色が出そうな作品)	いく事ができる。 <small>[様相観察・学習プリント]</small> 創)色の割合や構成を考えながら、制作していく事ができる <small>[様相観察・学習プリント]</small>	
	5. 友達の作品を鑑賞する。	全 ↑↓ 個	【承認】 ・色数やデザインのポイントに注意しながら鑑賞させ、色が出せるとみんなで拍手で承認していく。	鑑)友達の発表に耳を傾けて聞くとともに、アイデアや表現方法のよさを味わう事ができる。 <small>[様相観察・学習プリント]</small>	12
ま と め	6. 本時のまとめをする。	全	・回転させると色が出てくることを確認させる。 ・色が出ることで、変化した明度の高さに気をつけさせる。	関)回転混合による明度の変化を理解することができる。 <small>[様相観察・個人評価表]</small>	3
	7. 評価表に記入する。	個	・評価表に記入させる。		5
	8. 次時の予告を聞く。	全	・次時の予告をする。		

7 考 察

生徒は今まで色どうしを混色する場合、絵の具を使用しての体験しか持ててなかったため、回転させる事により色を混色する体験はなかった。まして白と黒の混色からいろんな色が出てくる事に驚きを見せていた。そして子どもたちから「もっとやりたい」とか「またしてみたい」という声があがり、子どもたち自身、自分がデザインをしたも

のが実際に色が出るのかという不安と実際に色が出せた時の喜びは、色に対する奥深さに気づくとともに、子どもたちの創造性や満足感または、今後のデザイン制作に対しての興味・関心または、意欲付けになったのではないかと思う。

(今回の題材の成果)

①生徒の面

- ア) 回転混合盤を取り入れることにより、生徒に興味・関心を持たせ、自主的な活動ができた。
- イ) 自分のイメージを短時間の中で集中して配色する事ができた。
- ウ) 友達の作品を鑑賞していく事で、お互いの個性を認め合う事ができた。

②教師の面

- ア) 機械的な教具を使うことで、教材・教具の工夫ができた。
- イ) 短時間の中で、集中して製作に取り組みさせることができた。
- ウ) 日常生活の中では見られない混合方法なので、生徒の興味・関心を持たせることができた。

(今回の題材の課題)

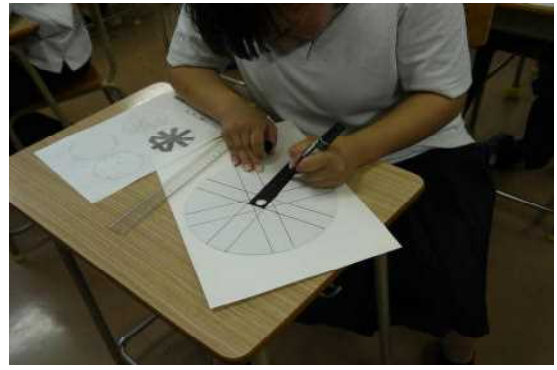
- ① 回転盤が自作教具なため、1台しか準備ができなく、作品を全員で鑑賞することができなかったため、今後班に1台の割合で増やしていきたい。
- ② 色の混色による表現方法をさらに深めていきたい。
- ③ 回転混合による表現方法は、日常生活の中であまり使われないので、1つの表現方法としておさえ、色の混色には変化があることを頭に入れながら、様々な色を混色させていきたい。

◎参考文献

- ・ 中学校美術指導資料「指導計画の作成と学習指導の工夫」 文部省
- ・ 中学校美術指導資料「美術科における学習指導と評価の工夫」 文部省
- ・ 中学校学習指導要領解説「美術編」 文部省
- ・ 学習指導改善のための実践事例集 福岡県教育委員会
- ・ 新学習指導要領の指導事例集 中学校美術 明治図書
- ・ 中学校新教育課程の解説 美術 遠藤友麗 編著



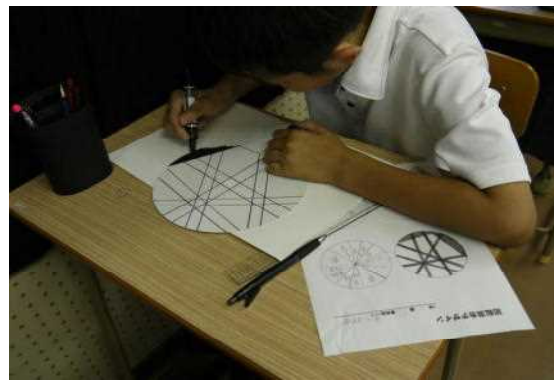
資料 1



資料 2



資料 3



資料 4